

日蓮大聖人御書全集

ときにゆうどうどのごへんじ

富城入道殿御返事

こうあん えき こと

（弘安の役の事）

新版
1349
く
1352

ときにゆうどうどのへんじ　こうあん　えき　こと

富城入道殿御返事（弘安の役の事）

こうあん　ねん　がつ　にち　さい　ときじょうにん

弘安 4 年（'81）10 月 22 日　60 歳　富木常忍

こんげつじゅうよつか　ぎよさつ　おな　じゅうしちにちとうらい　い　のちの

今月十四日の御札、同じき十七日到来す。また去ぬる後

しちがつじゅうごにち　ごしようそく　おな　は　つかごろとうらい　ほかたびたび

七月十五日の御消息、同じき二十日比到来せり。その外度々

きさつ　たま　ろうびよう　うえ　ふじきけ

の貴札を賜うといえども、老病たるの上、また不食気に

そうろう　へんぼう　たてまつ　そうろうじよう　おそ　すく

候 あいだ、いまだ返報を奉らず候 条、その恐れ少な

そうろう

からず候。

なに　い　のちのしちがつ　ごじよう　うち　い　ちんぜい

何よりも去ぬる後七月の御状の内に云わく「鎮西には

おおかせふ　そうら　うらうら　しまじま　はそん　ふねじゅうまん

大風吹き候いて、浦々・島々に破損の船充滿のあいだ、

ないしきようと しえんしようにん

乃至京都には思円上人」。また云わく「理あにしからんや」

とううんぬん

べつ

いちもん

だいじ

そう

等云々。このこと、別してはこの一門の大事なり、総じて

にほんこく

きょうじ

やまい

しの

いったん

もう

は日本国の凶事なり。よつて病を忍んで一端これを申し

そつち

候わん。

にちれん

うしな

な

こと

つく

い

これひとえに日蓮を失わんとして、無かろう事を造り出

か

し

ゆえ

にほんこく

しんごんしゅうとう

ださんこと、兼ねて知る。その故は、日本国の真言宗等の

しちしゅう

はつしゅう

ひとびと

たいか

いま

はじ

七宗・八宗の人々の大科、今に始めざることなり。しか

いち

あ

まん

し

たてまつ

りといえども、しばらく一を挙げて万を知らしめ奉らん。

い

じょうきゅうねんちゅう

おきのほうおう

よしとき

うしな

去ぬる承久年中に隠岐法皇、義時を失わしめんがた

ちようぶく やま ざす とうじ おむろ しちじ おんじよう おお つく

めに、調伏を山の座主・東寺・御室・七寺・園城に仰せ付

おな さんねん ごがつじゅうごにち かまくらどの おんだいかん

けらる。よつて同じき三年の五月十五日、鎌倉殿の御代官・

いがのたろうほうがんみつすえ ろくはら うしな お

伊賀太郎判官光季を六波羅において失わしめ畢わんぬ。し

おな じゅうくにちはつか かまくらじゅう さわ おな

かるあいだ、同じき十九日二十日、鎌倉中に騒いで、同じ

にじゅういちにち さんどう かいどう ほくりくどう さんどう じゅうくまんき つわもの

き二十一日、山道・海道・北陸道の三道より十九万騎の兵者

さ のぼ おな ろくがつじゅうさんにち よ いぬいのとき せいてん

を指し登す。同じき六月十三日、その夜の戌亥時より青天

くも しんどう らいでん ぶし くび うえ な か

にわか陰つて震動・雷電して、武士どもの首の上に鳴り懸

な か うえ しやじく あめ しの た

かり鳴り懸かりし上、車軸のごとき雨は篠を立つるがごと

じゅうきゅうまんき つわものとう とお みち のぼ ひようらん

し。ここに十九万騎の兵者等、遠き道は登りたり、兵乱に

こめ っ うま つか ざいけ ひと みなかく う よろい

米は尽きぬ、馬は疲れたり、在家の人は皆隠れ失せぬ、胃

あめ う めん ぶし うじ せた う よ

は雨に打たれて綿のごとし。武士ども、宇治・勢田に打ち寄

み つね さんちようよんちよう かわ すで ろくちよう

せて見ければ、常には三丁四丁の河なれども、既に六丁

しちちようじつちよう およ いちじようにじよう たいせき か

七丁十丁に及ぶ。しかるあいだ、一丈二丈の大石は枯れ

は う ごじようろくじよう たいぼくなが ふさ ひまな

葉のごとく浮かび、五丈六丈の大木流れ塞がること間無し。

むかしとしつな たかつなとう わた とき に な ぶし

昔俊綱・高綱等が渡せし時には似るべくも無し。武士これ

み みなおく み きよう

を見て皆臆してこそ見えたりしか。しかりといえども、今日

す みなこころ ひるがえ お ゆえ うまいかだ つく

を過ごせば皆心を翻し堕ちぬべし。さる故に馬筏を作

わた ひやつき せんまんき

つてこれを渡すところ、あるいは百騎、あるいは千万騎、

かくのごとく皆我も我もと渡るといえども、あるいは一丁、
みなわれ われ わた

にちようさんちようわた

あるいは二丁三丁渡るようなりといえども、彼の岸に付く

もの いちにん な

ひ おどし あかおどしとう よろい

者は一人も無し。しかるあいだ、緋綴・赤綴等の冑、そ

ほか きゆうせんひようじよう

しらぼし かぶととう かわなか なか う

の外、弓箭兵杖、白星の甲等の河中に流れ浮かぶこと

ながつき かななづき もみじ よしの たつたのかわ う

は、なお長月・神無月の紅葉の吉野・立田河に浮かぶがご

とし。

えいざん とうじ しちじ おんじようとう こうそとう き

ここに叡山・東寺・七寺・園城等の高僧等これを聞くこ

え しんこん ひほう だいほう しるし よろこ たま

とを得て、真言の秘法・大法の験とこそ悦び給いける。

だいいり ししんでん やま ざす とうじ おむろ ごだん じゅうごだん

内裏の紫宸殿には、山の座主・東寺・御室、五壇・十五壇の

ほう さか おこな

ほうおう ごえい かんきわ な

法をいよいよ盛んに行われければ、法皇の御叡感極まり無

たま かざ ち つ だいほつしとう みあし みて な たま

く、玉の厳りを地に付け、大法師等の御足を御手にて摩で給

だいじん くぎようとう にわ うえ はし お ごたい ち つ

いしかば、大臣・公卿等は庭の上へ走り落ち、五体を地に付

こうそうとう うやま たてまつ

け、高僧等を敬い奉る。

うじ せた くぎよう てんじようびと かぶと ふる

また、宇治・勢田にむかえたる公卿・殿上人は、甲を震

あ だいおんじよう はな い よしときしよじゆう えぶす

い挙げて、大音声を放つて云わく「義時所従の毛人ら、

うけたまわ むかし いま いた おうほう かたき な

たしかに承れ。昔より今に至るまで、王法に敵を作し

たてまつ もの なにもの あんのん くけん しし ほ はら

奉る者は、何者か安穩なるや。狗犬が師子を吼えてその腹

やぶ しゆら にちがつ い やかえ

破れざることなく、修羅が日月を射るに、その箭還つてそ

まなこ あた

とお ためし

お

の眼に中らざることなし。遠き例はしばらくこれを置く。

ちか わ ちょう よ はじ

にんのう はちじゅうよだい あいだ

近くは我が朝に代始まつて人王八十余代の間、

おおやまのみこ おおいしこまる はじ にじゅうよにん おうほう かたき

大山皇子・大石小丸を始めとなして二十余人、王法に敵を

たてまつ ひitori そかい と

もの みな くび

なし奉れども、一人として素懷を遂げたる者なし。皆、頸

ごくもん か むくろ さんや さら

かんとく ぶしとう

を獄門に懸けられ、骸を山野に曝す。関東の武士等、ある

げんぺい こうけとう せんぞそうでん きみ す たてまつ

いは源平、あるいは高家等、先祖相伝の君を捨て奉り、

いずのくに たみ よしとき げち したが ゆえ さいなん

伊豆国の民たる義時が下知に随うが故に、かかる災難は

しゅつたい おうほう そむ たてまつ たみ げち したが

出来するなり。王法に背き奉り民の下知に随うは、

ししおう のぎつね の どうざいなんぼく ちそう

師子王が野狐に乗せられて東西南北に馳走するがごとし。

こんじよう はじ

今生の恥これをいかんせん。急ぎ急ぎ甲を脱ぎ弓弦を

外 まい まい まね

はずして、参れ参れ」と招きけるほどに、いかにありけん。

さるとりするとき な かんとう ぶしとう かわ は わた

申酉時にも成りしかば、関東の武士等、河を馳せ渡り、

か せ きようがた むしや ひとり な

勝ちかかりて責めしあいだ、京方の武者ども、一人も無く

さんりん に かく よつ おう しま はな

山林に逃げ隠るるのあいだ、四つの王をば四つの島へ放ち

こうそう おんし ごぼう じゅうぼう

まいらせ、また高僧・御師・御房たちは、あるいは住房を

お ちじよく あ たま いま ろくじゅうねん あいだ

追われ、あるいは恥辱に値い給いて、今に六十年の間、

恥 雪 み そうろう いま か

いまだそのはじをすすがずとこそ見え候に、今また彼の

そうりよ みでし ごきとううけたまわ そうろう そうろう

僧侶の御弟子たち、御祈禱承られて候げに候あいだ、

あきかぜ

みず

てきせん

ぞくせん

いつものことなれば、秋風にわずかの水に敵船・賊船なん

はそんなつかまつ

そうろう

だいしようぐんい

ど

もう

どの破損仕って候を、「大將軍生け取りたり」なんと申

いの じようじゅ

よし

もう

そうろう

そうろう

もうこ

し、祈り成就の由を申し候げに候なり。また、「蒙古の

だいおう

くび

まい

そうろう

と

たも

ほか

大王の頸の参つて候か」と問い給うべし。その外は、い

もう

そうろう

ごへんじ

ごぞんち

かに申し候とも御返事あるべからず。御存知のために

粗

々

もう

そうろう

ないし

いちもん

ひとびと

あいふ

たも

あらあら申し候なり。乃至、この一門の人々にも相触れ給

うべし。

かなら

椎地

しろろ

うけたまわ

そうら

お

また、必ずしいじの四郎がことは承り候い畢わんぬ。

よ

すで

ろくじゅう

およ

そうら

てんだいだいし

ごおんほう

たてまつ

予、既に六十に及び候えば、天台大師の御恩報じ奉ら

つかまつ そろろ

見 苦

そろろぼう

引

繕

んと仕り候 あいだ、みぐるしげに候 房をひきつくる

そろろ

作

料

下

そろろ

ぜにしかん

い候 ときに、さくりようにおろして候 なり。銭四貫を

いちえんぶだいいいち

ほっけどうつく

りようざんじょうど

おんまい

もちて一閻浮提第一の法華堂造りたりと、霊山浄土に御参

そろら

とき

もう

上

たも

きようきようきんげん

り候 わん時は申しあげさせ給うべし。恐々謹言。

じゅうがつにじゅうににち

にちれん

かおう

十月二十二日

日蓮

花押

しんじよう

と きにゆうどうどのごへんじ

進上 富城入道殿御返事